



Data 2022-42
監督・脚本: アンドレイ・コンチャ
ロフスキー
出演: ユリア・ビソツカヤ/ウラジ
スラフ・コマロフ/アンドレ
イ・グセフ

👁️👁️ みどころ

1989年の天安門事件は有名だが、1962年にソ連南西部の都市ノボチェルカッスクで起きたノボチェルカッスク虐殺事件は、皆さん知らないのでは？それは一体ナニ？ロシアのウクライナ侵攻の中、ウクライナ東部のドンバス地方を構成するドネツク州やルハンスク州が有名になったが、ノボチェルカッスク地方はそのすぐ東隣りだ。

社会主義国で、なぜストライキやデモが？理論的にはそんな疑問も当然だが、現実には現実！市政委員会で働く女性、リューダが共産党を信奉しているのは当然だが、わがまま盛りの18歳の娘は？デモ隊鎮圧のためなら、軍隊は市民に銃を向けるの？そんなバカな！しかし・・・。

濱口監督の『ドライブ・マイ・カー』（21年）の快拳には大拍手だが、本作後半に展開される“ドライブ・マイ・カー”にも注目！危険を顧みずに娘を探し回る2人のドライブの結果は？本作ラストの感動的な結末と共に、それは、あなた自身の目でしっかりと。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■タイトルだけで必見！本屋大賞第1位の小説も必読！■□■

「同志」は、中国語で「トンジー」と発音する。五味川純平の『人間の条件』全6作を読み、その映画全6作を観た時、主人公の梶が捕虜になってしまうラスト2作では、捕虜になってしまった日本軍人たちの間で語られる「同志」という言葉が妙に印象的だった。世界で最初に社会主義革命を起こしたのは、ロシア（ソ連）。そして、その「革命の前衛」になったのが、ロシア（ソ連）共産党。そして、鉄の規律を誇る共産党内では、お互いを「同志」と呼んで尊敬し合っていたが、さてその内実は？

『人間の条件』では、捕虜になった日本軍人の要領のいい連中は、「最初に覚えるべき中

国語」として「同志」を挙げていた。それは、「同志」と呼べば、すべてが許される関係になるからだが、ホントにそうなの？しかして、『親愛なる同志たちへ』と題された本作は一体ナニ？本作は、1962年6月に起きたノボチェルカスク虐殺事件をテーマにした問題提起作だが、そのタイトルを見ただけで、こりゃ必見！

他方、2022年の本屋大賞第1位となった逢坂冬馬の『同志少女よ、敵を撃て』が現在、大ヒット中。これは、「先の大戦時にソ連で編成された女性ばかりの狙撃小隊を描く戦争小説。綿密な考証に基づきながらも、手に汗握る最前線の描写など娯楽性に富んでいる」そうだが、「同志」という言葉がタイトルに使われる小説は珍しいから、このタイトルだけで、これも必読！

■□■ 1962年6月のノボチェルカスク虐殺事件とは？ ■□■

あなたは『赤い闇 スターリンの冷たい大地で』（199年）（『シネマ47』192頁）を観た？中国の王兵監督の『無言歌（夾辺溝／THE DITCH）』（10年）（『シネマ34』281頁）もしんどの映画だったが、スターリン政権下の1933年にソ連で起きた「衝撃の実話」を映画化した同作の衝撃は大きかった。ロシアのウクライナ侵攻から2カ月近くになる今、情勢は大変だが、穀倉地帯のウクライナでなぜ「ホロドモール」と呼ばれる大飢饉が発生したの？それは、ピューリッツァー賞を受賞したニューヨーク・タイムズのモスクワ支局長ウォルター・デュランティの紹介で、若き記者がレス・ジョーンズが行った危険いっばいの取材旅行を元にした同作でしっかり確認したい。

他方、本作のテーマにされている、1962年6月にソ連南西部のロストフ州に位置する都市ノボチェルカスクで起きたノボチェルカスク虐殺事件とは一体ナニ？ウクライナの首都キーウの攻略に手間取ったロシアは、現在ウクライナ東南部に兵力を集中し、とりわけマリウポリの攻略に全力を注いでいるが、ノボチェルカスクはそんなウクライナとの国境沿いにある都市。そしてまたここは、かつてロシア帝国内で自治を認められたドン・コサックの首都でもあるそうだ。1962年当時のソ連の指導者はフルシチョフ。1953年に死亡したスターリンの後を継いで9月に共産党の書記長に就任した彼が、1956年の第20回党大会で行ったスターリン批判は有名だが、その後のフルシチョフの統治は如何に？毛沢東は、1957年からの大躍進運動と1966年からの文化大革命で誤った道を歩んだが、重工業に力を入れ、農業改革を実施したフルシチョフの路線は如何に？

ノボチェルカスク虐殺事件が起きたのは1962年6月1日～3日の3日間。1962年10月のキューバ危機でフルシチョフがアメリカのケネディ大統領と「核戦争も辞せず！」というギリギリの交渉を行ったことは有名だが、ノボチェルカスク残虐事件でフルシチョフはいかなる対応を？

■□■ 社会主義国でなぜストライキが？そんなバカな！ ■□■

社会主義革命は、労働者が資本家を打倒したものだから、新たな社会主義国で生産活動に従事するのは労働者自身。搾取がなくなり、計画的に管理された生産体制下では、各人

が欲するままにモノが与えられる。それがマルクスの唱えた学説だが、現実は何？現在、ロシアのウクライナ侵攻を契機とした経済制裁下、各国の物価上昇が続いているが、スターリン批判を断行したフルシチョフの新政策下、ノボチェルカッスクの住民たちの生活も豊かになるはずだったが、本作冒頭に見るノボチェルカッスクの町では、あらゆる生活物資の高騰に悲鳴を上げる市民たちの姿が登場するので、それに注目。

ノボチェルカッスクの市政委員会で生産部門を担当する女性リューダ・ショーミナ（ユリア・ビソツカヤ）は熱心な共産党員で愛国主義者だが、はじめてみるそんな事態に大困惑。彼女は年老いた父親（セルゲイ・アーリッシュ）と18歳の一人娘スヴェッカ（ユリヤ・ブロフ）と3人で穏やかな暮らしを営んでいたが、本作冒頭には、市政委員会の同僚で恋人のロギノフ（ウラジスラフ・コマロフ）とベッドを共にしている姿が登場するからビックリ！

一夜を共にしたロギノフと朝早く別れたリューダは食料品店に立ち寄り、「皆、朝7時に押しかけてきて、値上げに文句を言ってるわ」と愚痴をこぼす顔見知りの店員から、缶詰やタバコ等を買って受けたが、これは共産党幹部だけの特権らしい。自宅で家族と共に朝食を済ませ、美容院で身なりを整えたリューダはその足で市政委員会の会議に出席したが、会議の最中、電気機関車工場でストライキが発生したとの報告が入ったから、ビックリ。あわててリューダとロギノフが工場に赴くと、現地共産党トップのバソフは、「なぜ社会主義体制下でストが起こりうるのだ！」とわめき立てていた。それはマルクス主義を盲目的に信仰している共産党員たちが共通に持つ疑問だが、現実には現実。しかし、よくよく考えてみれば、なぜ社会主義体制下でストライキが起こりうるの？

■親世代 VS 娘世代。価値観の衝突と娘の悲劇は？■

日本の明治維新を担ったのは、幕府側か薩長側かを問わず、若者たち。イギリス発の『レ・ミゼラブル』（12年）（『シネマ30』48頁）やフランス発の『レ・ミゼラブル』（19年）（『シネマ46』120頁）を観ても、まちの中にバリエードを築き、「ラ・マルセイエーズ」を歌うのは、若者たちだった。そのことは、近時の台湾における、“ひまわり学生運動”や香港における“雨傘運動”でも同じだし、1989年6月4日の天安門事件でも同じだ。

1962年にノボチェルカッスクで起きたストライキやデモ行進に、市政委員会のリューダやロギノフたちが違和感を持ったのは当然。また、KGB 地方本部のヴィクトル（アンドレイ・グセフ）やフルシチョフの命令で、モスクワの党中央委員会から派遣されてきた書記のコズロフや第一副首相のミコヤンが、この事態を“国家的レベル”の危機と見なし、首謀者摘発をはじめとして厳正に対処しようとしたのも当然だ。しかし、18歳になっている一人娘スヴェッカはすでに日常的に母親とは異なる価値観を持っていたから、「工場に行ってはダメよ」という母親に対して、「抗議するのは自由よ」と反発して家を出て行って

しまったから大変。さあ、彼女はどこに？まさか同級生たちと共にデモに参加したの？

会議の席でコズロフやミコヤンたちに対して、「全員逮捕すべきです。扇動した者には厳罰を」と強硬手段を提案したリュウダの気持ちは本心。決して党中央の幹部にゴマをすったものではない。「軍による市民への発砲は憲法違反だ」という軍司令官の主張を一蹴したコズロフとミコヤンは、「直ちに兵士たちに銃器を携帯させろ」と命じたから、デモ隊と軍は一触即発状態に。天安門事件では、戦車の前に立つ一人の市民の映像が印象的だったが、中国人民解放軍が市民に向けて銃を撃つことはあり得ない。そんな“神話”が破れたのも事実だ。さあ、スクリーン上に映し出された多くのデモ隊はどこへ向かうの？また軍やKGBはそんなデモ隊（市民）に銃を向け、発砲するの？そして、スヴェッカの命はどうなるの？

本作中盤のスリリングな映像は、決して映画用に作られたものではなく、実話に基づく迫力いっぱいのものになっているので、それに注目！スクリーン上で展開されるそんな大混乱に巻き込まれたリュウダが、戻ってこない娘の身を案じて探し回ったのは当然だが、消息はわからないまま、ついにKGBのヴィクトルから尋問を受けることになってしまったから、リュウダの立場は大丈夫なの？

■■■本作ラストの『ドライブ・マイ・カー』は如何に？■■■

濱口竜介監督の『ドライブ・マイ・カー』が、第94回アカデミー賞で国際長編映画賞を受賞したことに日本中は大喜び。同作後半は、女性の専属運転手が運転する真っ赤なサブに乗った主人公が北海道へ“ドライブ”に向かったが、それは妻と死別して生き甲斐を失っていた彼の再生の旅だった。

それに対して本作ラストでは、リュウダがKGB本部のヴィクトルが運転する車で軍の検問をすり抜けてまで隣町に脱出しようとする姿が描かれる。それはヴィクトルから隣町に多数の遺体が埋められているという情報を聞いたためだが、KGBのヴィクトルと市政委員会のリュウダがそんなことをしてはヤバいのでは？もちろん、2人はそんなことは承知のうえ。しかし、こうなれば党則違反もクソもないらしい。

そんな2人が村人を半ば脅迫してまで赴いた墓地では、埋めた女の子の遺体は1人しかなかったようだ。しかも、その特徴は・・・？死体の確認まではできなかったが、娘はあのデモ隊の混乱の中で銃殺され、どこの誰かもわからないまま死体は処分されてしまったに違いない。そんな絶望状態の中で自宅に戻ったリュウダの愛国心や党への忠誠心が完全に失われてしまったのは当然だ。しかして、本作にはあっと驚く結末が待っているの、それは観客一人一人の目でしっかりと確認し、リュウダと共に涙を流したい。

■■■コンチャロフスキー監督に注目！主演女優にも注目！■■■

ヴェネチア国際映画祭審査員特別賞を受賞した本作のチラシには、「84歳の巨匠コンチャ

ロフスキーが祖国への愛と憎悪を鮮やかに描く最高傑作！」とある。そして、また、「私は信じていた。この祖国、母であること、そして我が人生を一。」とも書かれている。

私は、この巨匠アンドレイ・コンチャロフスキーを知らなかったが、パンフレットを読むと、1937年にモスクワで生まれた彼の父親は、作家のセルゲイ・ミハルコフ。そして、弟は、『太陽に灼かれて』（94年）や『12人の怒れる男』（07年）（『シネマ21』215頁）で有名な映画監督ニキータ・ミハルコフだと知ってビックリ！

他方、本作のリュウダ役で主演したユリア・ビツツカヤは彼の妻だと聞いて、それにもビックリ！彼女は1973年生まれだから、1937年生まれの夫とは36歳も離れているのでそれにもビックリ！そんな彼女は、本作冒頭のヌードシーンから感動のラストシーンまで出ずっぱりだが、その演技力はすごい。共産主義を信奉し、ソ連の指導者たるスターリンを信じ、フルシチョフを信じていたにもかかわらず、なぜノボチェルカスクの工場で大規模なストライキが？なぜ市政委員会への大規模なデモ行進が？そして、生意気盛りの18歳の娘スヴェッカはどこに消えたの？まさか、あのデモ隊の中に？そして、悪夢のような発砲事件、虐殺事件の中、スヴェッカの命は奪われてしまったの？あの死体はホントに私の娘だったの？

本作では、そんなスリリングでシリアス、そしてまた、政治的で人間的なリュウダをユリア・ビツツカヤが見事に演じているので、それに注目！もっとも、ある意味でロシアの政権批判ととれるような本作に出演して大丈夫なの？夫のアンドレイ・コンチャロフスキーは高齢だから「この先」は短いだろうが、妻のユリア・ビツツカヤはまだまだ将来性があるはずだから、私にはそんな心配も・・・。

2022（令和4）年4月21日記